

新型コロナウイルス感染拡大防止のため 各種、主催・共催行事の延期について

新型コロナウイルスの問題はまだまだ終息の気配が見えておりません。主催行事「創世ホール文化講演会（南伸宏氏講演会）」、共催行事「演芸会、3.11映画祭等」はいずれも昨年度から延期しておりますが、来年度中の開催を予定しております。

心待ちにしてくださった皆様にはご迷惑をおかけしまして大変申し訳ございません。

なお、各イベント開催情報等については、創世ホール通信及び北島町ホームページ上（<https://www.town.kitajima.lg.jp/>）でお知らせします。

劇団べんべろべえ公演

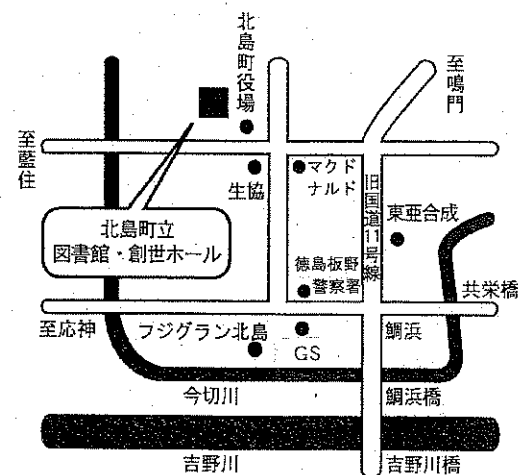
日時：令和3年2月25日(木) 午前11時
会場：2階 ハイビジョンシアター 入場無料
対象：就学前の子ども 赤ちゃんも大歓迎
演目：「モ～モ～モ～!!」他
問合せ：人形劇団べんべろべえ
(代表：兵頭 ☎088-698-6652)

※創世ホールに来場される方へ※

▼入場される方には、マスクの着用と手指のアルコール消毒をお願いいたします。

▼観客同士の距離を一定の間に保つため、3階多目的ホールの座席数を減らしております。(前後左右を1席空けてお座りいただくようにしております)

■なお、今後の感染症拡大状況に応じて、対応を変更することがあります。ご迷惑をおかけしまして恐れ入りますが、ご協力くださいますようお願い申し上げます。



牧弘子さん (小松島出身映画プロデューサー) の思い出

●小西昌幸 (元北島町立図書館・創世ホール館長)

■徳島県小松島市ご出身の映画プロデューサー・牧弘子さんがお亡くなりになった。年明けに、藤原道夫さん (映画監督) と牧良広さん (牧弘子さんの兄上) 連名による書簡が届き、それによってご逝去を知らされた。

■全く存じ上げなかったが、牧さんは乳ガンを発症しておられて、そのガンが肺に転移し、昨年12月21日朝10時頃に東京のご自宅で、医師、看護師、友人たちに看取られながら旅立たれたという。享年66。私より2つ上だ。

■牧さんには、2016年9月に創世ホール2階のハイビジョン・シアターで開催したドキュメンタリー映画「水と風と生きもの〜中村桂子・生命誌を紡ぐ」の上映会で大変お世話になり、以後連絡を取り合うようになった。

■上映会は3・11映画祭に連帯する当館にとって大切な取り組みだったので、多くの来場者を得たことは喜びだった。その功績は、牧弘子さんにある。

■今から私は、自分が書き手として不十分であることを承知の上で、牧さんの思い出をつづり、その営為を偲びたいと思う。「文化ジャーナル」では、2016年9月号 (260号) と10月号 (261号) で同映画上映会のことを書いている。

■そこには多くの比率を割いて、牧さんと共に展開した宣伝作戦のことなどをメモした。この追悼文では上記内容と重複する部分もあるかと思うが、どうかお許しを乞う。

■最初に牧さんにお目にかかったのは2012年だったと思う。牧さんがプロデュースを務めたドキュメンタリー映画「自尊を弦の響きにのせて〜96歳のチェリスト青木十良 (あおき・じゅうろう)」 (監督: 藤原道夫) の徳島県内での上映のことで創世ホールを訪ねてこられて、相談を受けたのだった。

■小松島市在住の鈴木綾子さん (徳島ベンクラブや阿波の歴史を小説にする会や海野十三の会などで活躍する才媛) のご紹介だった。同映画は、結論から言うところのこの種の作品上映では当時の徳島県内でもっともふさわしいと思われる徳島ホールで上映されて、700名の来場者があり大成功を収めたのだった。

■私ももちろん観に出かけた。一人の年老いた音楽家の活動記録を通して、観る者に人の生き方や存在を問いかける尊い映画作品だった。

■再会は2015年だった。「水と風と生きもの」 (監督: 藤原道夫) という映画を作ったので、徳島県内で上映できないでしょうかというご連絡をいただいたのだ。その時点で徳島ホールは既になかった (建物が耐震構造でないということで閉館していた)。しばらく思案していたが、どうすることも出来ず、そのまま時が流れた。

■途中、徳島ホール元支配人で元徳島新聞記者の杉田卓哉さんからも直々に相談を受け、二人して腕組みをして思案したこともあった。

■やがて天啓を得る出来事があった。翌2016年3月、創世ホールは3・11映画祭に初めて取り組み、遠藤ミチロウさんのドキュメンタリー映画「おかあさん、いい加減あなたの顔は忘れてしまいました」を上映した (3月11日に上映)。

■これは徳島県内のレンタルビデオ業界の連絡組織の人達から持ち込まれた企画で、遠藤ミチロウさんの演奏会を多数手がけてきた当館にとって必然性があり、また東日本大震災以降ずっと連帯支援の催しを積み重ねてきた当館として重要な、意義ある上映会になった (館としての共催企画)。

■その3・11映画祭の公式ホームページを見ると、多くの映画作品の中に「水と風と生きもの」もあることを知った。これなら当館共催企画として、胸を張って上映会がやれる。牧さんの期待に応えられる。「牧さん、う

ちでやりましょう、2階のハイビジョン・シアターという会場です。そこならディスクをセットしたら大きな画面で映像と音声流れるようにできます」、そう連絡をした。こうして創世ホール2階ハイビジョン・シアターでの上映会の企画がスタートした。

■ただ、実現までにはいくつかのハードルがあった。当館のハイビジョンの仕組みは設置時期の関係でアナログ・ハイビジョン方式であり、デジタル・ハイビジョンとは有効走査線の本数などが異なっていた。それは変えようがない。一番のネックになっていたのが、信号の関係なのか何なのか、16×9の横長の比率の画面 (110インチ) の中央部に4×3の状態では映像が映らないという現象だった。そのほかに機器の接続端子の形状がブルーレイの再生装置の端子と合わないなど、専門技術者でなくては解決できない問題があり、これを解決する必要がある。この時に牧さんのご友人の徳島市の黒田電気店の方が活躍することになる。

■私の方は、高松の設置メーカーに相談し、助言を得た。そして、元館長の小山建夫さんとエミールソフト開発の川竹道夫さんに応援を依頼した (二人とも自宅の旋盤でネジを作るような人で、ハード面に詳しい)。

■黒田さん、小山さん、川竹さんの日程調整をし、3人のボランティア作業で数日間、合計8時間の作業ののち、思うような映像を流すことができたのだった。

■上映会は9月24日と25日の2日間。両日とも10時半と13時半の2回上映とし、計4回の上映会を設定した。それまでに牧さんは2回徳島入りし、私達は宣伝のために動いた。2度目の時は、エフエムびざん、梅津龍太郎さんの事務所、四国放送、徳島新聞社などをまわった。その結果、9月15日のエフエムびざん「Bステップ・トーキング」、18日の四国放送ラジオ「日曜懐メロ大全集」 (梅津さんと岩瀬弥永子さんの番組) に2人で出演し宣伝することができたのだった。

■番組中で流す音源も2人でそれぞれ用意した。

■「水と風と生きもの〜中村桂子・生命誌を紡ぐ」 (藤原道夫監督作品、119分、2015) は面白い映画だった。大阪府高槻市にあるJT生命誌研究館とその館長・中村桂子さんのことを追ったドキュメンタリー作品で、中村館長が旅をして赤坂憲雄、末盛千枝子、新宮晋、伊東豊雄、関野吉晴といった人々と対話する。そして宮沢賢治の「セロ弾きのゴーシュ」舞台化を成し遂げる。この舞台が見事で、舞台そでで中村館長自らが朗読をし、その隣では生命誌研究館の村田英克氏も歌ったり朗読をしたりという進行役を務め、舞台中央では超一流の人形劇、音楽劇が展開される。明らかに世界最高水準の高い質の舞台劇が達成されているのだった。背景に映し出される、幻想的な照明と映像だけでも息を呑むような出来だった。

■4回の上映会には、合計で120名超の来場者があった。この4分の1を牧さんが集めた。ガンで闘病中だった元徳島ホール支配人の杉田さんも来て、喜んでくださった。杉田さんはその後まもなくお亡くなりになった。

■牧さんは宣伝準備も含めて、合計12日間徳島市で滞在されたのだったが、感心したのは、この間になじみの喫茶店を作り、その常連客の人達を動員するようなことを達成していたのである。これには、ただただ感服した。

■その年の秋、11月に私は東京に行った。3日間の滞在で、地引雄一さんと会い、四方田犬彦さんと会い (翌年2月の講演会の打ち合わせ)、模索舎、タコシエ、東京ステーション・ギャラリーなどに行き、最終日のお昼前に牧さんが勤めている映像制作会社メディア・ワンを訪れた。小田急線代々木八幡駅で降りて地図を見ながら行こうとしたのだが、迷ってなかなかたどり着けなかった。カフカの主人公のようだったと思った。朝10時過ぎには到着するはずが、30分も迷ったのだった。しばらく会社を見学させていただき、メディア・ワンが毎月全日空の機内で流す映像作品を作っていること、

民放各局の大きな報道番組の現場に社員を派遣し、番組制作に携わっている会社であることなどを知った。この日、藤原道夫監督 (メディア・ワン取締役相談役) と、牧さんと私の3人で昼食を食べる約束をしていた。私がオムライス好きなので、代々木上原駅近くのお店を探してくださっていた。

■この時の会話は楽しかった。2016年11月14日のことだった。

■先の上映会企画を進める内に知ったのだが、藤原監督は、当館ゆかりの紀田順一郎先生と親しい方だった。紀伊国屋書店の企画発売で2000年前後に近代日本の文化形成に関わった偉人にスポットを当てた映像作品が多く発売されたことがある。その監修者が紀田順一郎先生で、藤原道夫さんは永井荷風や宮本常一や渋沢敬三などの巻で監督をご担当されていたのである。

■そして藤原さんは、佐々木守さんと組んで「万里の長城」のテレビ・ドキュメンタリーを作っていた人でもあり、勿ちに所望され、北島町で開催した池田憲章氏講演会「故郷は地球〜脚本家・佐々木守がめさしたもの」 (2007年2月) の資料一式をお送りしたこともあった。こういう不思議なご縁があり、紀田先生や池田さんの催しをやってきた当館に、藤原監督も連なることになったのだった。引き合わせてくれたのは、牧弘子さんだった。

■それから、牧さんから不思議な依頼を受けた。2018年9月だったと思う。

■【以下、大意】阿波の歴史を小説にする会が毎年発行している『阿波の歴史小説』では掲載作品の感想文募集をしている。入選すると賞金が貰えるので藤原監督ともども応募している。今年も応募して、2人とも入選した。10月に徳島県立文学書道館でその表彰式と感想文の朗読会がある。ついては自分達は出席できないので、小西さんに出席と朗読をお願いできないかしら。——こうして私は同年10月7日、文学書道館に出かけた。そして人前で、藤原道夫さんの文章を朗読し冷や汗をいっぱいかいたのだった。

■最後にお会いしたのは、2019年2月6日だった。その日は東京におり、全国の劇場や音楽堂職員対象のアートマネジメント研修会で講師を務めた (文化庁・全国公立文化施設協会主催、演題「中小規模館における予算ゼロのおもしろ事業展開」、司会が岸正人さん、もう一人の講師が長崎の出口亮太さん)。

■会場は国立オリンピック記念青少年総合センターだった。牧さんは「そこならメディア・ワンの事務所のすぐ近くですよ、藤原も行きます」とおっしゃって、講演後の空き時間を利用してお会いすることになったのである。講演を聴講してくださった河上進さん (南陀楼綾繁さん) にも同席していただくことにして、15時半に小田急線参宮橋改札口で待ち合わせて、近くの喫茶店で2時間ほど4人で楽しく話をして過ごした。

■その後は年賀状や電話で近況を報告しあった。牧さんは65歳で会社を定年退職されたが、新作の映画を準備中とおっしゃっていた。それはベネズエラの「エル・システム」という音楽活動による尊い社会貢献の取り組みについての記録映画で、現地にも撮影に行かれたとのことだった。 (*現在、その映像素材は約10時間分あり、藤原監督が編集に着手しておられると聞く)

■牧さんは、本来もっとも世間に存在が知られて良い人だった。例えば「徳島新聞」には東京などで活躍中の本県出身者を紹介するコーナーなどもある。一度私は牧さんを推薦したこともあるのだが、かなわなかった。

■小松島市出身の映画関係者というと、私には、俳優の大杉漣さん (故人)、「少女革命ウテナ」の監督・幾原邦彦さん、映画音楽の住友紀人さんなどが浮かぶ。牧弘子さんもプロデューサーとしてそこに連なる映画人なのである。やがて彼女が関わった「エル・システム」の記録映画の上映会が全国で開催され、大きな話題を呼ぶであろう。そのとき世間は、彼女の偉大な業績の一端を知ることになるであろう。私はそれを信じてやまない。牧弘子さん、またお会いしましょう。その時まで、さようなら。(20210213脱稿)